

全国在宅療養支援診療所連絡会 第3回全国大会 プログラム別詳細

内容	ランチョンセミナー
タイトル	医師とメディカルスタッフが協働で実践する認知症の医療とケア ～大切なことはいつも本人が決める～
共催	エーザイ株式会社
日時	平成28年3月13日（日）12:20-13:20
会場	第3会場（605）
座長	平原佐斗司（梶原診療所）
演者	藤本直規（藤本クリニック 認知症疾患医療センター診療所型 理事長）
企画趣旨・概要	<p>認知症医療では、かかりつけ医だけでなく、専門医外来でも、認知症の人や介護者の日常生活を支えるためには、看護師などのメディカルスタッフの役割は重要である。本発表では、もの忘れクリニックでの16年間の活動で、医師と看護師などが連携ないし協働して行っている「診断」「治療」「認知症ケア」「相談」「多職種協働」「人材育成」などを紹介することで、認知症の人と介護者を支えるために診療所の役割を考えてみたい。</p> <p>1999年に開設したものの忘れクリニックでは、月平均30名の新規受診者と600名の再来者に診療を行っている。診療における看護師や受付スタッフの役割は、予約受付での対応、待合室の環境作り、待ち時間におけるきめ細かな配慮、受診への不安を取り除くことも含めた本人への問診や心理テスト、支持的に関わる家族への問診などを行う。また、診断後は、医師の告知後の本人・家族の支援のための個別面談を繰り返し行っている。</p> <p>さらに、病名の告知後に、病気の受容が難しい軽度認知症の本人・家族に行う「外来心理教育」では、病気や症状の受け入れと仲間作りを目標にしている。家族支援のためには、随時の「面談・電話・ファックス相談」、隔月に「本人・家族交流会」を開催している。診断後の本人・家族支援は医師と看護師の“協働”で行っているが、地域包括支援センターなどの地域との連携は看護師が窓口になっている。</p> <p>また、介護保険事業所として、参加者の希望で始めた、社会参加を大切にしながら、その活動内容を自分たちで決めていく認知症専用デイサービス(DS)「もの忘れカフェ」を行っている。自施設内のDSと診療部門との“連携”は、DS参加者が外来のアメニティーを定期的に整えてくれたり、展示した作品でDSへの抵抗感の軽減を図ってくれるが、逆に、通院家族が、活動に用いる材料を寄付してくれている。医師とケアスタッフとの“連携”の要は看護師である。</p> <p>相談活動としては「もの忘れサポートセンター・しが／滋賀若年認知症コールセンター」での相談活動を年間約400件、介護事業所の現場に出向いていく「現地相談」を、看護師が中心になって行っている。</p> <p>多職種・地域連携の仕組み作りを目指す「滋賀認知症ケアネットワークの会」の活動を8年間行った後、多職種の連携「考え方の共有化」のための少人数の事例検討会「認知症の医療と福祉の連携 IN 守山野洲」を行っているが、医師と他の支援職が同じ場で共に学べる、人材育成の場となっている。</p> <p>最後に、2011年から始めた退職直後か休職中の若年認知症の人が内職仕事をする「仕事の間」は、本人たちの希望で始めたが、4年目の現在、若年認知症の人約20名、軽度高齢認知症者数名、精神障害の人数名、社会とつながりの持ちにくい若者数名、現役の介護者などが参加し、社会での役割を再獲得する場であるとともに、最初期の治療・ケアの場となっている。</p>

（敬称略）